

聞名仏教

第63号
(発行日)
2015年12月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》
○ 〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始。
○ 〈念仏座談会〉
毎月2日と12日 午後3時始
○ 〈聖典学習会〉
毎月6日 午後7時始。
○ 〈真宗入門講座〉
毎月18日 午後6時30分始。
* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

安楽浄土に至るひと

(和讃法話)

安楽浄土にいたるひと

五濁悪世にかえりては
釈迦牟尼仏のごとくにて
利益衆生はきわもなし

(浄土和讃)

(現代語訳)

浄土に往生して仏のさとりを開いた人は、還相の菩薩として、五濁悪世である迷いの世界にかえりてきて、釈迦牟尼仏が衆生を教化し利益されたように、衆生に利益を与えていく、そのことにきわまりがない。

* * *
このご和讃で、「釈迦牟尼仏のごとくに衆生を教化し利益される」ということは、『仏説無量寿経』

に出てまいります。すなわち釈迦牟尼仏である釈尊が、浄土に生まれた方は

「他方の五濁悪世に生じて彼に同ずること、わが国のごとくなる」

と説かれています。それが

もとなつていられるご和讃です。

この「他方の五濁悪世」とは、阿弥陀仏のお浄土から見て、それ以外の世界が「他方」の世界であり、他方の世界の中で五濁悪世である迷いの世界のことです。その一番身近なのがこの世すなわち娑婆世界としての私たちの世界です。娑婆世界はまさに五濁悪世です。

そして「彼に同じて」の「彼」とは釈迦牟尼仏（お釈迦様）のことです。この世界に出現された釈迦牟尼仏と同じように、「浄土にいたるひと」は、この世に現れ出て衆生を教化し利益されるのです。「彼」については世間の人という解釈もあります。

ここで、私たち真宗門徒はお釈迦様をどう受け取らせていただければよいかを考えてみたいと思います。

まずお釈迦様（釈尊）はどいうお方か。一番通説になつていられるのは、今からおよそ二五〇〇年ほど前、インドに

《念佛寺報恩講》

十二月二十二日（火）

午後二時始

ご講師 大谷大学准教授（真宗学）

藤原正寿先生

*なおお十二月二十一日は午前十時より
勤行・法話（念佛寺住職）があります。

生まれ、人生の根本問題に悩み、それを解決するべく、出家求道し、三十五才の時に証りを開いて覚者（ブツダ）になられ、それ以後伝道の旅を続け、八十才で涅槃（一切の煩惱が滅した浄らかな領域）に入られたお方という説です。

この場合は、この世の生でのみお釈迦様を語る見方です。これは世界中でよく知られていることです。

この場合の人生の根本問題とは、「生まれて死ぬ」という生死の問題です。どれほど生きたいと欲しても、死なねばならない、という問題です。これは誰にも課せられている根本矛盾であり根本苦悩です。それをごまかさず、これを解決したいと出家修道されたのがお釈迦様です。

人はとかく、この問題を抱えておりながら、まともに向

これが第一の説です。

第二の説は第一の説の背景をさらに説かれている説です。

お釈迦さまがこの世で修行して完全な悟りを完成されたのは、この世だけのたった六年間の修行だけによつてさとりを完成されたのではなくて、この世に生まれる前から、生まれ変わり死に変わりして菩薩としての修行を重ね、この度人間としてインドに生まれて、ついに最終目的である大いなる悟りを成就してブツダ（仏）になられた、という見方があります。

なんども生まれ変わりして修行をする、ことに他の衆生の苦を代わって引き受けていく慈悲の修行を重ねられた、そのご修行のすがたは感動的なジャータカ物語として今日たくさん残されています。そういうご苦勞を重ねられて最終的にこの世にお釈迦様としてお生まれになって悟りを完成されたといわれるのです。

この説は、この世で仏陀になられた釈尊のおさとりは、深甚なる真実を悟られたのであり、その生き様と説法は偉大であるということを表そうとされている釈尊像だとも伺われます。

第三には、もともと永遠の仏が、衆生を救わんがために人としてインドに生まれて、

出家し修道し悟りを開いていくというご苦勞をされて仏陀釈尊となり、説法して衆生を教化され、また仏の世界（浄土）に帰られたお方と見る見方があります。

こうした第一の説と第二の説の背景として第三の説を受け取ることができません。

真宗は、この世にお生まれになった釈迦牟尼仏は久遠の仏様（阿弥陀仏）がこの世の衆生を救うために釈迦牟尼仏となつて現れて下さつたお方であるという第三説の見方が中心です。それを親鸞聖人はご和讃で

「久遠実成阿弥陀仏

五濁の凡愚をあわれみて 釈迦牟尼仏としめしてぞ

迦耶城には応現する」

とうたつておられます。

さて、浄土に生まれたお方は今度は還相の菩薩となつて、五濁悪世にかえつてきて、衆生を教化される。その場合、この五濁悪世で衆生を利益されるお姿は多様でありましょう。お釈迦様のおすがたはその一つの典型的なすがただと思います。どちらにしましても、さまざま相でもつて衆生を教化し利益されるのでありましょう。

ここで五濁悪世の五濁とは何か。それは『仏説阿弥陀経』に説かれていますように「劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁」の五つの濁りであります。そういう五濁の世がこの世間の有様ですから、五濁悪世といえます。

劫濁とは、時世が墮落し、天災、戦争などが起こること。見濁とは、邪悪な思想がはびこること。煩惱濁とは、種々な煩惱・悪徳が盛んになること。衆生濁とは、衆生の資質が身心ともに低下すること。命濁とは、人間の寿命が短くなること。その五濁が、時代が下るにしたがつて盛んになつていくと説かれています。

現代の時代はまことに五濁が盛んではないでしょうか。劫濁ということでは、二〇世紀には一億人以上の人が戦争によつて殺されました。これほど戦争の犠牲者が多かった時代は人類史上はじめてのことです。

見濁になると邪悪な思想がはびこり、たとえばドイツでも旧ソ連でもカンボジアでも間違つた思想が要因となつて、百万単位の大虐殺が起こりました。最近ではイスラム国などによる悲惨なテロが絶えま

せん。ここにも過激で邪悪な思想信条の影響があります。煩惱濁は、たとえば資本主義社会では経済的利潤の追求が第一とされ、経済的な利益を追求するシステムが世界化しています。まさに貪欲という煩惱が世界をおおつています。

衆生濁というのは、人間の質が劣つてくるという、それは人間の感覚や感情が不純となり、文化が享樂的かつ軽薄になつていく傾向が強くなつてくることに表れています。文学も絵画も音楽も思想も宗教も、質の高いものは好まれなくなり、質の劣つたものが大衆化していく。そういうものをよしとする人間感覚や感情は、人間的な質が低下してきたすがただといえます。

時代が下ると命濁で、人の寿命はだんだん短くなるということですが、これは少し分りにくいですね。むしろ人間の寿命は長くなってきているのではないかと思うからです。

しかし、もっと時代が下ると、だんだん寿命は短くなるとも予想されます。自然環境の

悪化、すなわち大気汚染、二酸化炭素の増大、原発事故などによる核のゴミの拡散、汚染物質の摂取による遺伝子の異常、人口の増大による食料や水資源の不足など、将来を考えると寿命は頭打ちになります。そうなるとき命濁は明らかになるかもしれません。

このように、浄土にいたる人たちが菩薩として、五濁悪世の私たちの世界にかえつてきて、様々なすがたで人々を真理に導き、釈迦牟尼仏のようにならざるに利益なされるのであると、『無量寿経』や曇鸞大師の『讚阿弥陀仏偈』のお心にそつてうたわれたのがこのご和讃です。

(了)

平成28年度御年忌年回表

1	周忌	平成27年	亡
3	回忌	平成26年	亡
7	回忌	平成22年	亡
13	回忌	平成16年	亡
17	回忌	平成12年	亡
23	回忌	平成6年	亡
27	回忌	平成2年	亡
33	回忌	昭和59年	亡
50	回忌	昭和42年	亡

(23回忌と27回忌をせずつに25回忌に
いとなむ数え方もあります。また50回忌
以後は50年ごとになります)

木村無相さんの臨終法話

れてしもうた。

(香樹院さんの)

【木村無相さんの肉声でのお話を、亡くなられる三日前(一月三日)に、少しばかりテープに収録したものを起こしました。場所は福井県武生駅近くの林病院内で、ナースセンター前の一室。無相さんはこの二日後に昏睡状態になられ、三日目の昭和五十九年一月六日(満七十九歳)に往生されました。非常に重篤で苦しい息の中で聞かせをいただきました。そしてベッドに横になられたまま震える手でサインペンを取って次の歌を書いて下さいました。

生き死にの

道はただただ

ナムアマミダ

ただ称えよの

仰せばかりぞ

以下は、その時に録音したもので、主に仏法に関するお話の部分です。()内は編者の言葉です。】

* * *

何を言おうとしたのか、忘

一生涯の内に、一人だけ、相手になれたらええという、その一人はな、一人は、最後はな、自分一人や。自分一人、自分一人が助かれればええというてもええんじや。それが大仕事や、その上での自信教人信じやわ。

自分が助からんで、なんで人が助かるか。人助けはもう還相の仕事として、カッコの中に入れて、この世ではただ自信、自信と。

自信いうても、凡夫の信心と違う。我が機の極重悪人と知らしめるところの、他力回向の信心。その極重悪人は、「唯称仏」という法より外に助かる道はないと、こうお知らせ下さる。どっちも向こうからのお知らせで、こっちの心がああしたたら、こうしたらということはない。

いつ時節が来て、ああそうやったかと気づかれる日が来る。来るからよう聴聞せよと、『求法用心集』に書いてあるわ。香樹院師が、

「貞信、貞信、よく聞けよく聞け、よく聞き聞きすると、なーんにも分からぬなーりに、助けて下さるということが、わけが分かるからなあ」

なーにも知らぬなり、なーんにも分からぬなり、ただ仰せのまま。もうそれだけのこっちゃ。

もうくたびれた。

*

手を、手を握つて。

(はい)

六十年、二十歳から六十年の聞法、求道の結果はお念仏一つ。それも「ただ念仏せよ」の仰せのままに、称えるというだけでな。もうそれよりほかに、念仏称えられんようになつたら、よく分かること。ただ念仏せよの仰せ一つ。念仏せよというて特別なんがあるんじやないの。

如来のおん目にとまり、如来のおん目にとまつて、十方衆生というものが如来のおん目にとまる。念仏衆生というものは、十方衆生というはずじやわ。ぜーんぶ念仏者じやわ。如来のおん目から見たら、一人も欠けるところはない。他宗の人であろうが、反念仏者であろうが、なんであろうが、如来のおん目に、十方衆生よと、こういう風に、

如来のおん目にとまつた者はみーんな念仏者じや。広義の念仏者じや。広義の念仏者だけで助かるんだよ。

同じことばかり言うけれど、ありがたいことに、病気の上にいるると、「凡夫の方にはなーんにもないんじやなあー」ということが思い知らされ、苦しければ苦しいまま、お念仏さえ申さず、終わらせ

てもろうても、もうそれで充分。極楽があるうがなからうが、参らせてくれようがくれまいが、そりやあ如来様の仕事や、ワシの仕事と違う。ただ、お聞かせをいただくだいことじや。

もう、もう苦しい。

(木村さん。今までずっとありがたく、今までおそだてありがとうございました。あとついでやります。木村さんの教えを守つて、教えをきぎみつけていきます。木村さんの言われたことをきぎみつけていきます)

わからん(注ー編者の声が聞こえないとのこと)、わからん、あかんなあ。

(木村さんの言われたことをきぎみつけていきます)

よくあえたなあ。如来様の誓願力のおかげでなかつたら、あうことができなかった。こ

んだけのなにが聞いてもらえなかつた。

弥陀願力のおかげや。ナンマンダブ、ナンマンダブ、ナンマンダブ、ナンマンダブ、ナンマンダブ、ナンマンダブ、ナンマンダブ、ナンマンダブ。土井君、帰らないかん時間、時間ずつと過ぎてる。帰つてくれていいよ。

(もうじき帰ります)

*

何か言うことがあるんじやないか。

(今もう別に)

無い。

(全部お聞きしてます)

結論するところはなーんにもないの。凡夫のなーんにもない信心も安心もなーんにもないままで、凡夫のまんまで死んでいけばええの、生きていけばええの。

いわゆる昔から妙好人の話や、信者の話や聞いたるが、そんなもん、真似はちよつともいらんの。自分は自分なりの業報のままに、人の真似なんかいらんの。妙好人がどうあろうと、信者がどうあろうと、そんなもん、真宗人であらうと、なからうと、そんなことどうでもええのや。ただ普通の人間として生き、普通の人間として死んでいけばええの。なーんもいらんの。

もうこんだけ、こんだけ言うだけで、口の中が渴^{かわ}いて、ものが言われへん。

*

もうすぐ帰らなあかな。あともう何分や。

(あと一時間ほどあります)

*

うちのな、ほんと、たった一人の姉が生きとつたんじゃがな。この七月二十日に、肺ガンで死んだそうな。

(東京でしたな)

東京、おつたところは知らん。風の便りに聞いたんじゃ。もう思い残すことは何も無い。おかあさんによるしくな。

(長々とお世話になって、ありがとうございました。本当に)

いやもう、お世話になったのはこつちやった。真由実さんによるしくなあ。よう、本当の内助の功をよくするやろ。(ありがたいです)

なあ、紀さん、そんなんないわ。

*

もう、そこまで聞いて、そこまで、ちよつとじゃ。ほつといてもな、ああそうやつたと気がつく。だから、気がつこうとするとダメ。ほつといてやつとらなきあいかんが。気がついたらええとか、そんな

なことなーんにもいらんの。

凡夫に属することはなんにもいらんの。こつちはな、無仏法、無信仰の、聴聞する人と同じでいいの、少しでも真宗人らしい気持ちになろうとするの、そりゃー色気や。(色気ですか)

*

信心の、特益^{とくやく}というのは、何か信心いただいたら特別なことがあるように思うけど、その錯覚を除いて下さって、

信心いただいたもいただかなくても、まったくの素人と同じじゃということハッキリさして下さるの。

欲が起こつたり腹を立てたり、疑つたり、はからつたり、普段の人とちよつとも変わらんといいことをハッキリさせて下さる。じゃから普段の生活に迷いがなくなるの。これが人間じゃ、これが自分じゃ、これが人生であるということが、ハッキリさせてもらえる。

信者ぶらんで、そのまま死なしてもらえらんじや。信者ぶらんでそのまま、生かしてもらえらんじや、それが信心の特益、特益や。

*

十年、お世話になって、病院にかよわせてくれた園長さんに、お礼も言いたいし、頼

み事があるの、後始末のな。

もうそれだけで、だれーにもあいたいことはない。もう、もう、岩崎さんにも十一月十六日におうたし、紀さんにもあうことができて、言いたいことばちばち言うたんで、もう心残りはない。そんなにな、あせつて、自分をどうしようということは、なーんにもせんでいいこと。(はい、分かりました)

*

信者に、なろうとするから、苦しむの。信者になれぬままで上等なの。それが最高じや。ほかの人はそれを知らんの。ほれで、今から求めて、聞いて信者になろうと思つて、一生懸命になる。信者になろうと思えんままで、もうそのままで、なれんままでいいの、本当に。気休めでない。ごく無信の普通の平凡な人として、終わればええの。(分かりました)

そこまで分からしてくれる人に、なかなかあえない。真宗のいわゆる「教義」というものに迷わされるの。(そうですね)

*

十時に、夜の十時になるかなあ。(いいです、すぐですから)

帰り着いたら十時になるな

あ。(いいです、それは)

すまん、すまん、ありがとう、ありがとう。

(木村さん、ぼつぼつ帰ります。本当にありがとうございました)

ありがとう、ほんまにありがとう。それはこれでおしまいうか、それはわからんけれども、思うだけのこと言うた。元気に、もうのんきにやつてちよつだい。おかあさんによるしくな、真由実さんによるしくなあ。

*

なんにも難しいことも、信者めいたこともいらんのやで、信者になれんでええねんで。(はい、分かりました)それが普通の人にハッキリせん。(肝に銘じときます)それがハッキリして、信者になれんままで、なろうとせんままで、ただ煩惱、名利愛^{みょうり}、疑い、はからい、そのままで、ただナンマンダ、ナンマンダ、これ、これだけや。それもできなかつたら、「汝、一心正念にして直ちに來たれ」という、仰せだけ。「我が名を称えよ」という仰せだけ。もう如来のおん目にふりかかっ

ただけで、念仏者じや。念仏者にあえてなりたかつたら、なりたいたもなりたくないも、もうただ向こうからの(仰せだけ)

向こうからの、向こうの思いが加わつたんじゃからどうしようもないわ。ほんならもうこれで。

(もうこれで失礼します)顔、よう続いたなあ。ご縁が深かつたなあ、もう十六、七年にもなるかなあ。

ありがとう、もう紀さんにあえただけで。園長さんに、園長さんだけに話したいことがある、もうそれだけや。あとはなんにもいらん。園長さん明日来てくれる、来てくれる、今朝来てくれたけどわかる、今朝来てくれたけどわかる、今朝、二時間ぐらのおつたそうなけど、わからんや、あわんから、だまつとるから。(以下略)(了)

《同朋の会》お知らせ

平成二十八年

一月二十二日(火)

午後二時始

法話 念佛寺副住職

土井尚存